

令和7年度 全国学力・学習状況調査 箱根町立小・中学校の調査結果について

令和7年4月17日に実施された全国学力・学習状況調査の箱根町の結果を次のとおりまとめました。

1 調査の目的（文部科学省より）

- ◇義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る
- ◇学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる
- ◇そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する

2 調査の概要

箱根町では、4校65人の児童生徒が参加

（内訳：町立小学校3校6年生29人 町立中学校1校3年生36人）

3 調査内容

（1）教科に関する調査（国語、算数・数学、理科）

中学校理科は、文部科学省 CBT システム (MEXCBT) によるオンライン方式 (CBT: Computer Based Testing) で実施します。

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 等
- ② 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力 等

※調査問題では、上記①と②を一体的に問うこととする。

（2）質問調査

児童生徒に対する調査	学校に対する調査
学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査 （例）学習に対する興味・関心、授業内容の理解度、基本的生活習慣、家庭学習の状況 など	指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査 （例）授業の改善に関する取組、指導工夫、学校運営に関する取組、家庭・地域との連携の状況 など

4 調査時間

小学校（児童質問調査は、各学校の状況に応じて、調査時間を設定してオンライン方式で実施。）

1 時限目	2 時限目	3 時限目	
国語(45 分)	算数(45 分)	理科 (45 分)	児童質問調査(20 分程度)※

中学校（生徒質問調査は、学校の状況に応じて、生徒質問調査→理科の順に調査時間を設定してオンライン方式で実施。）

1 時限目	2 時限目		
国語(50 分)	数学(50 分)	生徒質問調査(20 分程度)※	理科 (50 分)

5 結果の概要

(1) 教科に関する調査結果の分析内容について

◆小学校【国語】

「話すこと・聞くこと」では、自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉えることはできていたが、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることはやや正答率が低かった。目的や意図に応じて、日常生活から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することに引き続き課題が見られた。

「書くこと」では、図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き方を工夫することや、書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章を考えることができていた。調べたことを基に詳しく書く問題では、指示された2つの内容の一方しか記述していない児童が半数近くおり、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することに課題が見られた。

「読むこと」では、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することや、目的に応じて文章や図表を結び付けて必要な情報を見つけ出すことに課題が見られた。複数の資料を読み、それぞれの情報がどのような関係なのかを考えながら読ませるような指導の改善や工夫が必要である。

◆小学校【算数】

「数と計算」では、小数と比べ分数の理解に課題が残り、共通する単位分数を見い出したり、数直線上に示された数を分数で表したりすることの正答率が低かった。

「図形」では、平行四辺形の作図の仕方について、正答率が全国平均を上回った。また、角の大きさについての理解もできていたが、五角形の面積を二つの基本図形に分割して求める問題からは、三角形や台形の面積を求める公式を十分に活用できていないことが解答タイプの割合から推察された。

「測定」では、はかりの最小目盛りの大きさを捉えることに課題が見られた。

「変化と関係」では、伴って変わる二つの数量の関係に着目し、問題を解決するための必要な数量を見い出すことに課題があり、見い出せても求め方を説明できない児童が多かった。

「データの活用」では、簡単な二次元の表から条件に合った項目を選ぶこと、目的に応じたグラフを選ぶことなどは比較的できていたが、適切なグラフを選んだ判断理由を言葉や数を用いて説明できていない児童が多かった。

全体的に知識及び技能の習得については成果が上がっている。今後は、問題解決の過程や結果を数学的に表現し伝え合う活動を通して、思考力、判断力、表現力等を高めていきたい。

◆小学校【理科】

花のつくりと発芽については、おしべとめしべ及び受粉について正しく理解している児童が多かった。また、レタスの発芽条件を整理しながら新たに問題を見つけることも正答率が高かった。これは、観察、実験の結果を比較して、差異点や共通点を基に、具体的な条件に着目し、問題を見い出していくような授業の積み重ねが成果となって表れているものと捉えられる。

今回の調査では、磁石の性質や電気回路の仕組みに関する設問に誤答が多く見られた。特に身の回りの金属の中で、「電気を通すもの」・「磁石に引き付けられるもの」を選択する問題に正答している児童は見られず、その中でもアルミニウムと銅の性質の捉えに誤りが目立った。また併せて、直列と並列それぞれのつなぎ方の特性に関する理解にも曖昧なところが見られた。そのため、身近な素材から実験・観察を通して正しい知識を身に付けていけるように日々の授業を工夫していく必要がある。

無解答に関しては、全体的にほぼ無かった。今後も、実験や観察等の結果について、考察し、自分の考えをもつことができるようにすることが重要であると考ええる。

◆中学校【国語】

「話すこと・聞くこと」では、自分の考えが明確になるように、論理の展開に注意して、話の構成を工夫することはできていたが、自分の考えを分かりやすく伝えるためのスライドの工夫について記述する問題で、指示された2つの条件を踏まえ発表の内容を捉えて工夫の仕方と関連付けることができていない生徒が多かった。

「書くこと」では、美術展のちらしの宣伝文を記述する問題で、条件で示された発表のまとめの内容を捉えて美術展の工夫した点について、接続詞などを使って適切に関連付けることができなかった生徒が多かった。また、読み手の立場に立って表記や語句の用法、叙述の仕方などを確かめて手紙の文章を推敲する問題の正答率も低かった。

「読むこと」では、島崎藤村の小説の文章展開の効果を説明する問題で、文章の構成や展開、表現の効果について根拠を明確にして考えることが難しかったようで、無解答率も高かった。根拠を明確にした上で考えを表現する力に課題があるので、目的意識を持って文章を読み、必要な情報を精査し、考えの根拠を見つけ出し論理的に書いて説明する力を高めていく必要がある。

◆中学校【数学】

「数と式」では、事柄が常に成り立つとは限らないことを説明する場面において、反例をあげることが比較的できていた。反面、連続する3の倍数の和の問題で、成り立つ事柄を記述していても、文字を用いた式から読み取れる事柄ではない誤答の割合が多かった。

「図形」では、多角形の外角の意味がよく理解できていた。一方で、平行四辺形の性質を考察する場面において、証明されたことから新たに分かることを捉えたり、条件を変えた場合について証明の一部を書き直したりする力に課題が見られた。

「関数」では、一次関数 $y=ax+b$ について、変化の割合を基に x の増加量に対する y の増加量を求めたり、事象に即してグラフから必要な情報を読み取ったりすることなど、知識・技能の習得に課題が見られた。

「データの活用」では、必ず起こる事柄の確率についてよく理解できていたが、相対度数の意味を理解できていない生徒が多かった。

今後は、数学の用語の意味について理解できるよう指導するなど、基礎基本から丁寧に取り組むとともに、生徒が数学的に問題を発見・解決する過程をより大切に扱っていきたい。

◆中学校【理科】

地層の違いから水が染み出る場所を判断する問題では、地層を構成する粒の大きさに着目して分析・解釈できている生徒が多かった。特にこの問題系統では、小学生の学習状況調査においても、粒の大きさの違いから水が染み込む様子についてよく理解できており、小学校段階からの系統的学習における成果が表れていた。またその一方では、直列・並列の回路の仕組みやその特性等に関して、異なる回路のつなぎ方による電流や電圧等の大きさの違いについて、小学生・中学生共に理解できていないところが見られた。プロパンガス・都市ガス・空気それぞれの密度の大小を問う問題に誤答が多かった中では、一酸化炭素の特性を避難行動から適切に判断する問題には正答率が高かった。このことは繰り返し実施されている避難訓練など日々の生活経験が活かされていると推測できる。

どの問題においても無解答はほぼなく、小学生同様に評価できる点である。しかしながら、実験から生じた疑問点に対する解決策や探究過程を振り返る記述式の設問に関しては、若干無解答が見られた。短答式での記述として出題された元素を記号で表すことに関する知識及び技能を身に付けることと併せて今後の課題として意識していきたい。

(2) 児童生徒に対する質問調査（オンライン方式）結果の分析内容について

【小学生の質問回答より】

- 「自分には、よいところがある」と回答した児童が9割を超えており、「先生は、よいところを認めてくれる」、「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる」の項目とともに肯定的な回答が全国平均を大きく上回った。学校的全教職員で児童をほめる・認める教育を推進してきたことが、児童の自己肯定感の高まりとして表れてきている。また、「かながわ子どもサポートドック」の取組により積極的に児童に関わって支援していることの成果でもあると考える。
- ICT機器の使用頻度に対する質問について、週3回以上と回答する児童の割合が全国平均を大きく上回り、ICT機器を活用することで自分の考えや意見を分かりやすく伝えることができると9割以上の児童が回答している。多様な児童のニーズに応えるためにICT機器を効果的に活用してきた成果だと考える。
- 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善については、どの項目ともほぼ全国平均を上回った。話し合う活動や自分の考えを発表したり、協力しながら課題の解決をしたりする等、意識して取り組んでいる成果が表れている。
- 学校の授業時間以外における1日当たりの勉強時間（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）について、1時間以上勉強をする児童の割合は、昨年度より若干増加しているものの、全国平均を下回った。学習習慣づくりの取組について共有し、定着が図られるように努める必要がある。

【中学生の質問回答より】

- 「先生は、授業やテストで間違ったところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれる」、「1、2年生のときに受けた授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていた」とそれぞれ回答した生徒がどちらも9割を超えており、全国平均を上回った。生徒数が減少する中、生徒一人ひとりに丁寧に関わり、個に応じた指導に取り組んできた成果であると考えられる。
- 「毎日30分以上読書をする」と回答した生徒の割合は、全国平均を上回った。さらに、約8割の生徒が、「読書が好き」と回答しており、こちらも全国平均を上回った。この結果については、朝読書の時間の実践など、継続した取組の成果であると考えられる。
- 「地域の大人に、授業や放課後などで勉強やスポーツ、体験活動に関わってもらったり、一緒に遊んでもらったりすることがある」と回答した生徒の割合は全国平均を上回っている。これは一部の部活動で地域の方が指導していることや地域教育の一環で町の施設で学習したり、講師による出前授業を行ったりしている成果と思われる。
- 「学校における授業時間以外における1日当たりの学習時間」について、1時間以上勉強している生徒の割合は昨年度よりも増加した。一方、「学校が休みの日の1日当たりの学習時間」については、1時間以上勉強している生徒の割合は4割に満たず、全国平均を下回っていることから、休日における学習習慣づくりの取組について共有し、定着が図られるように努める必要がある。
- 「1、2年生のときに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用したか」について、「週3回以上」とであると回答した生徒の割合は、全国平均を下回った。ICTを活用して学習指導することは、教師のみならず、生徒に対しても学力向上に高い効果があることが明らかになっていることから、今後、ICT機器の積極的な活用を進めていくことが求められる。